



ひびぎ

No.42

ドラム缶工業会会報



理事長就任にあたって

日鐵ドラム株式会社 代表取締役社長
今井 忠

-ドラム缶工業会の第19代目の理事長に就任されましたが

前谷口理事長のときに工業会発足50周年という記念の年を迎えました。また、奇しくも鋼製ドラム缶がネリー・ブライ女

史によって発明されて100年という年でもありました。まさに時代の転換点に立っていると強く感じています。第一の変化は、東アジア域内の経済成長と分業の進展、それに伴い物流が活発化していることです。域内の成長を積極的にとらえることが重要だと思います。もう一つの変化をあげれば、資材高騰、原材料入手難の時代に入ったことです。さらに、工業会メンバー内での合併が進んだことが大きな変化です。

- 資材高騰、原材料入手難にどう対処しようとお考えですか

基本は各会社が自ら対処すべきことですが、必要とされる量のドラム缶やペール缶を供給できる環境づくりは工業会の仕事でもあります。とくに現在の鋼材不足は一時的なことではなく、BRICsと呼ばれるような国々が成長のサイクルに入ったことが背景にあります。また、日系自動車メーカーなどが必要とする高品質の鋼材は日本の高炉メーカーが主に供給していることから、極度にタイトになっています。この問題は缶の供給安定性を揺るがしかねない重要な問題です。資材を円滑に調達するためにも鋼材を買えるだけの製品価格の改善に取り組まねばなりません。また、より少ない鋼材で多くの缶を流通させるためには、ハンドリングを丁寧にしていただきリユース率を高め、品質的に可能なら更生缶がより多く利用されるようにすることが求められます。また、使用後にスクラップにならないように遠隔地から運んでも経済的に成り立つ価格にするなど、ドラム缶を大事にいただける条件を整えることが、結果としてドラム缶の必要数量を確保することになると考えます。

- 更生缶工業会との連携が重要になりますね

そのとおりです。これまでもプラグの鉄化や環境負荷物質を含まない外装塗料色の標準化などを共同で推進し大きな成果をあげています。ドラム缶の利用価値を高めることが共通のテーマです。たとえば、省資源の観点から厚みを薄くすれば、同じ鉄からより多くの缶を作れます。しかし、リユース率が下がれば意味がありません。このように薄手化も、ユーザーはもとより更生缶業界とも一緒に取り組まなければ実現しない課題です。

- 国際交流はどうお考えですか

国際物流の進展、なかでも東アジア域内の物流量の増大から今後、国境を越えた物流容器としての規格の共通化が重要になると思います。今年5月に初めて北京でアジアのドラム缶の国際会議が開かれました。時機を得た大会でした。国際的な交流を重視し、積極的に発言していきます。

- 足下の需要はいかがですか

この1～6月の統計を見ますと、新ドラム缶は前年同期比で6%伸びています。たいへん需要は旺盛です。有難いことですが、さきほど申し上げた資材高騰、原材料調達難が足かせになりつつあります。ペール缶についても、前年同期比で1.1%増加しています。ここの二年で鋼材価格が25%以上上昇したことにより、各社の経営はたいへん厳しいものになっています。なんとしても、原材料調達可能な製品価格の改善が急務になっています。

- 最後に

工業会の役割はいま一層増しています。安心・安定・安全という3つの「安」を守り続け、ドラム缶、ペール缶の発展に貢献できるよう努力する決意です。

新理事紹介

理事長		日鐵ドラム(株)	代表取締役社長	今井 忠
副理事長		JFEコンテナ(株)	代表取締役社長	谷口 勲
		(株)ジャパンペール	代表取締役社長	寺中 捷郎
常任理事	200リッター缶関係	東邦シートフレーム(株)	代表取締役社長	村上 靖
	中小型缶関係	ダイカン(株)	代表取締役社長	里 卓郎
	ペール缶関係	新邦工業(株)	代表取締役社長	関根 利三郎
委員長	企画・統計委員長	日鐵ドラム(株)	常務取締役	高木 建
	技術委員長	JFEコンテナ(株)	常務取締役	清野 芳一
	ペール委員長	(株)長尾製缶所	取締役	長尾 年晃

(注)企画委員会、業務委員会は、6/30付けで企画・統計委員会として統合。



ユ ー ザ ー 訪 問

今回の訪問先は
株式会社松村石油研究所様です

松村石油研究所は独創的な技術開発に基づいて多彩な製品を提供してきました。2003年11月にはJASDAQ市場に株式を公開するとともに、主要製品のブランドとして広く浸透している「MORESCO=モレスコ」を全面に打ち出して企業ブランドの向上に取り組んでいます。同社の生産拠点は特殊潤滑油とホットメルト接着剤の赤穂工場と、流動パラフィンとスルホネートの素材を担当する千葉工場ですが、今回は千葉工場を訪問しました。

1958年(昭和33年)の設立以来、研究開発重視の高機能化学品企業として発展を続けてきましたが、貴社の歴史から聞かせてください

弊社の原点は1907年に松村善蔵が神戸市に設立した丸善砒油に始まります。1933年に丸善砒油から生産部門が独立した丸善石油(現コスモ石油)を経て、1958年に松村石油から分離独立して松村石油研究所として創立されました。当時圧倒的に輸入に依存していた特殊潤滑油、流動パラフィンなど特殊石油製品を独自の技術開発で国産化しようという志を掲げて発足しました。高真空ポンプ油、工場や機械設備を火災から守る難燃性作動液、流動パラフィンおよび石油スルホネートなど現在も高いシェアを確保している製品を相次いで国産化しました。

現在の本社・研究センターは2005年度に開港が予定されている神戸空港に近い神戸市中央区です。生産拠点は流動パラフィン、石油スルホネートを生産する千葉工場と、特殊潤滑油とホットメルト接着剤を生産する赤穂工場(兵庫県赤穂市)があります。海外ではタイと中国・無錫で生産を行っています。昨年11月にJASDAQ市場へ株式公開し、04年2月期売り上げは前期比7.8%増の79億7,500万円、経常利益は71.1%増の3億1,700万円を計上しました。

千葉工場は1966年に生産を開始しました

1961年に流動パラフィンの生産を西宮工場で開始しましたが、需要が急速に立ち上がり、生産が間に合わなくなったこと、市場規模の大きい関東に生産拠点が必要ということで京葉コンビナートの一角に工場敷地を確保、1965年に着工しました。その後原料貯蔵タンク用地を買い増して、現在の敷地面積は2万3,479平方メートルになっています。流動パラフィン業界唯一の一貫生産システムを構築、生産能力は流動パラフィン年間2万klおよび副生する石油スルホネート同2,400トン、アルキルベンゼンを原料にする合成スルホネート同500トンになっています。流動パラフィンの原料の潤滑油はコスモ石油、ブリカン、新日本石油、出光興産の3社から供給を受けています。

流動パラフィンは石油を原料にするオイルのなかで最終製品にあたるもので、潤滑油留分に含まれる芳香族炭化水素や硫黄化合物を除去した純粋な炭化水素です。化粧品、トイレットリー用基材、プラスチック滑剤など広範な用途が広がっており、15品種の生産を行っています。さらに高度な精製技術で乳児の肌に触れるベビーオイルにも使用する精製流動パラフィンも生産しています。石油スルホネートは溶解性など優れた物性を備えた産業用界面活性剤です。合成スルホネート



千葉工場 工場長
高梨 雅廣



千葉工場 業務課 課長
鈴木 一雄

は石油スルホネートに比較して分子量分布の範囲が狭く、抗乳化性、耐オイルステイン性、さび止め性で優れた性能を持っています。

海外企業を含めた競争も激しそうですが

流動パラフィン事業に外資系企業の参入した1990年代初めが工場として最も厳しい時代でした。93年に生産ラインの自動化を進め、その後も省人・省力化を進める一方で、生産工程の改善や収率アップに取り組みました。国内需要そのものは微増又は横這いですが、2003年の生産量は1万7,150トンに達しました。これからは流動パラフィンの安全性やクリーンな特性が環境・安全・衛生という社会が求めるニーズに合致しており、新しい市場開拓の余地は大いにありますと判断しています。

グリーンを全面に押出して、工場の美化に積極的に取り組んでいるようですね

2004年度の会社スローガンとして“お客様に届けようクオリティカンパニー MORESCOの心を”を工場正門など目につくところに掲げています。これにリンクした工場運営の基本方針として第一に安全、第二に工場の美化を徹底することで、高い品質の製品を安定供給することにつながると確信しています。コーポレートカラーの鮮やかなグリーンをドラム缶や工場の建屋などに導入展開し、環境・安全にも配慮していることをアピールしています。

工場で発生する廃水は電解処理、薬剤処理、濃縮乾燥処理によって無害化、一部を工程水として再利用して、残りは放流しています。また、流動パラフィンのスルホン化工程では硫酸を使用しますが、廃硫酸は隣接している日曹金属化学千葉工場にパイプラインで輸送して処理・精製して、スルホン化剤として再利用する完全リサイクルシステムを構築しています。

1998年に品質に関する管理システムISO9002の認証を取得、2001年にはISO9001を取得しました。環境管理システムISO14001の認証に向けて作業を進めており、年内には取得できる予定です。

製品の物流ではドラム缶の比率が高いようですが

ローリーが出荷の50%以上を占めております。納入量が多く相手先がタンクなどの貯蔵設備を保有する場合はローリーが経済的ですが、必ずしも受け入れ設備が十分でないユーザーも多く、ドラム缶とペール缶などに依存しています。使用するのは新缶、再生缶で年間約3万本程度になっています。新缶は異物の混入を嫌う流動パラフィンに、再生缶は石油スルホネートに使用しています。新缶、再生缶ともグリーン色のドラム缶で統一していますが、新缶は鮮やかなグリーン、再生缶は濃い目のグリーンと一見して識別できるようにしています。このほか18リットル缶やペール缶を使用しています。



ドラム缶に対する要望などを聞かせてください

1日あたり100本程度を充填しており、ドラム缶の積み降ろしで時折傷つくケースがあるようですが、最も心配している異物の混入は皆無に近い状態です。ドラム缶に製品を充填するにあたっては、ハロゲンランプでドラム缶内部を目視検査していますが、問題になるケースはほとんどありません。ドラム缶メーカーは納期も含めて厳しい要求に対応しており、高い品質管理を行っていると思います。最近は再生缶の品質が著しく改善されており、安心して使用しています。

所在地

〒290-0045 千葉県市原市五井南海岸12-3

TEL 0436-22-2181 FAX 0436-21-8629

鉄鋼業の現況について

(社)日本鉄鋼連盟

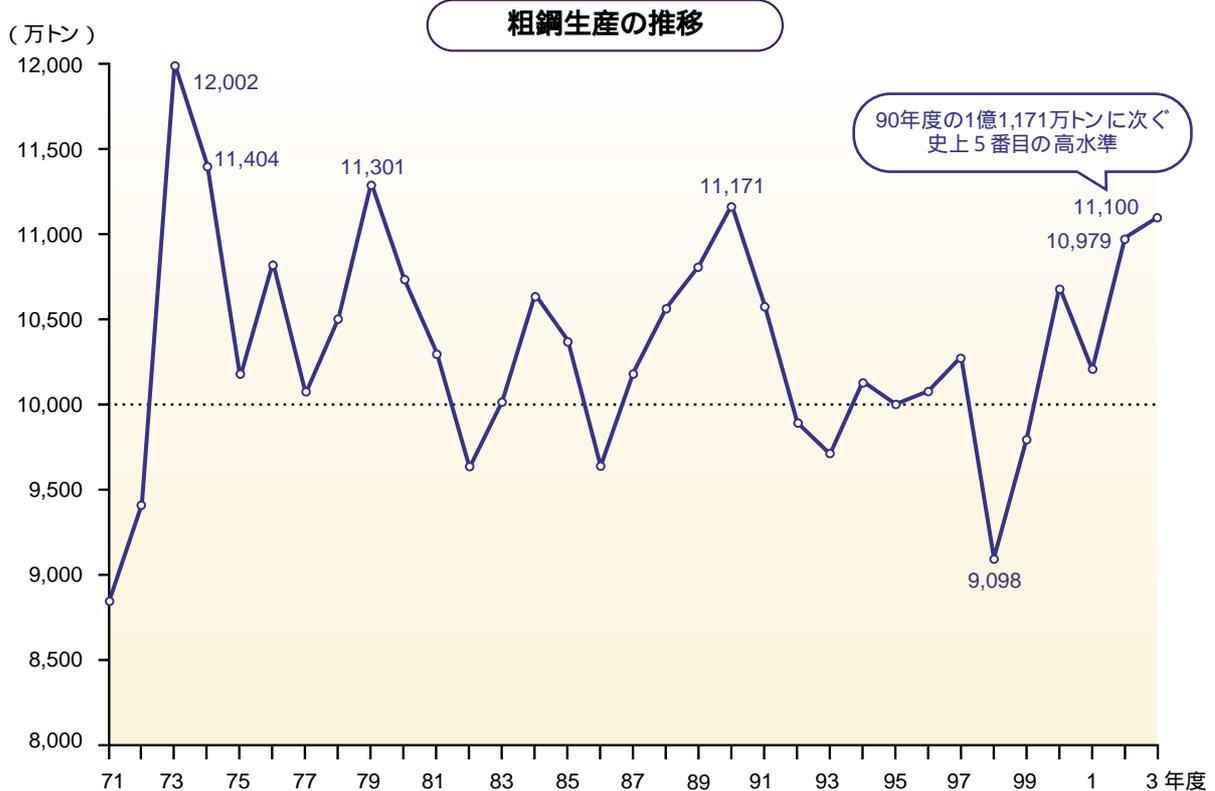
現下の鉄鋼情勢は需給ともに拡大基調で推移しています。

すなわち、粗鋼生産は2003年度が1億1,100万トンと、90年度の1億1,171万トンに次ぐ高水準で、史上5番目の生産となりました(図参照)。

90年度はバブルのピーク期であり、非住宅を中心に建設需要が牽引役を果たしていました。この90年度のバブル期の消費構造と03年度を比較してみると(表参照)、普通鋼鋼材消費量は27%の落ち込みとなっており、建設、製造業ともに減少しました。また、建設の不振から、全体に占める建設ウエイトが51%から45%と低下しており、内訳の土木、建築はともに数量が大幅ダウン、ウエイトも低下しています。一方、製造業は数量的には20%弱の減少となったものの、ウエイトは上昇しており、造船の回復が目立ち、自動車の減少も比較的軽微に止まり、中期的にみるとこの両部門が内需の下支え要因となりました。

03年度の粗鋼生産における最大のプラス要因は、鋼材輸出と特殊鋼鋼材の生産増といえます。中国を中心とする堅調なアジア向け輸出(90年度比88%増)と、需要の大宗が自動車向けである特殊鋼鋼材生産(同15%増)の伸長が大きく寄与しました。

04年度上期の粗鋼生産は5,670万トンと見込まれており、年率では03年を超えるペースで推移しています。右表に見る04年度の鉄鋼需要も、土木以外は高水準横ばい増加が見込まれています。現在鉄鋼需給は全ての品種においてタイトです。とりわけ造船、産業機械、建築を中心とした「厚板」、自動車、電気機械、容器を中心とした「薄板」については、需要分野が軒並み好調であり、当面タイトな状況が続くとみられますが、フル操業下にあるメーカーは今後とも需要見合いの供給姿勢で臨むものとみられます。



普通鋼鋼材国内消費、輸出入荷ならびに特殊鋼鋼材生産

(単位：千トン、%)

	90年度		02年度		03年度		'03 /02	'03 /90	04 見通	
	ウエイト	ウエイト	ウエイト	ウエイト	ウエイト	ウエイト				
普通鋼鋼材	建設計	41,515	51	27,895	47	27,027	45	3.1	34.9	→
	土木	12,516	15	8,605	14	7,660	13	11.0	38.8	↘
	建築	28,999	36	19,290	32	19,367	33	0.4	33.2	↗
	製造業計	39,957	49	31,461	53	32,489	55	3.3	18.7	
	造船	2,916	4	4,167	7	4,158	7	0.2	42.6	→
	自動車	13,979	17	12,359	21	12,773	21	3.3	8.6	↗
	産業機械	7,124	9	4,270	7	4,980	8	16.6	30.1	↗
	容器(★)	2,542	3	1,872	3	1,844	3	1.5	27.5	→
	消費合計	81,472	100	59,356	100	59,516	100	0.3	26.9	↗
	輸出向け出荷	11,954		22,467		22,490		0.1	88.1	→
特殊鋼鋼材生産	16,104		17,727		18,485		4.3	14.8	↗	

出所：日本鉄鋼連盟、経済産業省

注：(1)普通鋼鋼材部門別消費の03年度は暫定値。

(2)普通鋼鋼材輸出入荷、特殊鋼鋼材生産は経済産業省鉄鋼統計による。

(3)04見通は日本鉄鋼連盟想定で03対比。

★ 容器の中のドラム缶出荷実績(出所：ドラム缶工業会)

90年度	02年度	03年度	'03/02	'03/90	04見通し
370	368	390	6.0	5.4	↗



ドラム缶のある風景



5月、池袋本町プレーパーク(東京都豊島区)のイベントにドラム缶風呂が登場。集まった子供達は泥遊びの後の露天風呂に大喜び!今でも大切な遊び道具として活用されているそうです。

(2004年7月6日付豊島新聞にも紹介されました)

平成16年暦年上期(1-6月)出荷実績

平成16年上期出荷実績は、下の表に示す通り、200L缶で前年同期に比べ、106.0%と6.0%の増となりました。用途別にみると前年同期比で全体の76.5%を占める化学は5.6%増、15.3%を占める石油は12.8%増となりました。

ペール缶は前年同期比101.1%と1.1%の増にとどまりまし

た。用途別で見ると、全体の50.0%を占める石油が0.6%減、43.1%の化学は1.7%増、実数で121千本の増と、200Lドラムとは異なる荷動きとなっております。

ペールタイプを含めた中小型缶は、前年同期と比べて104.5%の877,653本となりました。

(単位：千本)

缶種	用途	石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年同期比(%)
200L缶		1,118 (112.8)	5,599 (105.6)	369 (109.7)	103 (103.5)	129 (79.2)	7,318	106.0
ペール		5,737 (99.4)	4,957 (101.7)	462 (107.6)		332 (112.7)	11,488	101.1
100L缶		4	68	10	2	4	88	110.0
50L缶			148	2	3	38	191	115.8
アス缶型			2				2	
その他の容量缶		微	247	微		11	258	93.8
200L缶	亜鉛鉄板缶		37	微	2	3	42	116.7
	ステンレス缶		14	微	2	3	19	146.2
	小計		51		4	6	61	124.5
中小型缶	亜鉛鉄板缶	5	107	12	3	5	132	103.1
	ステンレス缶		4		微	微	4	100
	小計	5	111	12	3	5	136	103.0
合計		9	627	24	12	64	19,542	103.0
前年同期比		101.5	104.0	110.3	104.5	91.5	103.0	-
構成比		17.9	73.6	5	1.3	2.2	100.0	-

(注)1. 200L缶及びペール缶の下段は前年同期比。 2. 構成比は、ドラム缶の出荷トン数の構成比。

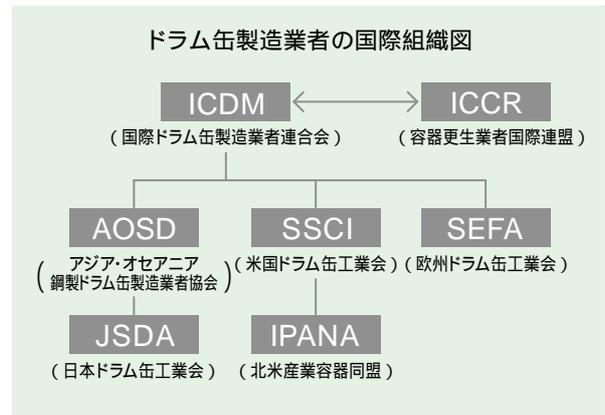
ICDM(国際ドラム缶製造業者連合会) 東京役員会報告

本年5月14日に東京でICDM役員会が開催され、以下の通り合意しましたのでご報告します。

- これまでのJSDAに替わり、AOSDをICDMを構成する地域工業会とする。
- ICDM、ICCRはそれぞれ独自に3年毎に国際会議を開催していたが、将来的にこの2つの会議を両工業会の共同開催とすることを目指して、来年5月に予定していたICDM東京国際会議は中止する。

なお現在ICDM会長は、マーク・ヴェストラーテ氏(SEFA 理事長兼プラグデン社CEO)であり、AOSDのICDM正式役員はJSDA 理事長兼AOSD会長、今井 忠氏(日鐵ドラム(株)社長)及びAOSD副会長、柳 基亨氏(仁成産業(株) 韓国 社長)の2名となっております。

現在のドラム缶製造業者国際組織図は、右の表の通りです。



ICDM : International Confederation of Drum Manufacturers
 AOSD : Asia-Oceanic Steel Drum Manufacturers
 SSCI : Steel Shipping Container Institute
 SEFA : Syndicate Europeen de L'Industrie des Futs en Acier
 JSDA : Japan Steel Drum Association
 IPANA : Industrial Packaging Association of North America
 ICCR : International Confederation of Container Reconditioners
 (旧称 : ICDR)

業界動向

会員動向

ドラム缶工業会・正会員である株式会社山本工作所は、三西容器製作株式会社及びその100%出資会社である三井化

学株式会社との間で、三西容器製作(株)福岡県大牟田市)の有するドラム缶の製造・販売に関する事業を平成16年10月1日付けで株 山本工作所が譲受することについて合意しました。

ドラム缶からコラム感

ドラム缶の思い出

昭和4年1月2日生(75歳)
東京都出身
ドラム缶工業会
元危険物容器対策委員長
平成2年6月～平成4年6月
元株山本工作所 常務取締役
平成4年6月常務取締役退任



山下 和久

製造業者連合会)の創設が決定。

これ等三つの会議に出席し、その都度各地の関係先を訪問、討議を行い、交流を深めたことは、大いに国際感覚が培われた?と自負したものでした。

本題は、「委員長時代の思い出」というのが事務局からの依頼なのですが、何分十年一昔よりも前のことで、どれが適当なのか判りません。そこで、未だに思い出すことが「思い出」と決めて、次の二つをご披露いたします。

その1 * * * * *

どちらかというとヘビースモーカーの私は、喫煙小物のライター・パイプには少々煩いのです。パイプはダンヒル、半手造りと本物の二本が未だ健在です。ライターは、ロソフ・ジッポなど、種々使ってきましたが、初めての海外旅行の免税店で買って以来、ダンヒルに凝ってしまいました。いわば愛用品です。多い時には四種類のダンヒルを占有し、一人悦に入ったものでした。

ところが、84年、第二回訪米視察団に同行、ワシントンDCでの第一夜、忘れもしないメイフラワーホテルのロビーで最も愛するタイプのそれを紛失という大失態を犯したのであります。幸い、柴野事務局長の支援により、金銭的な損害は免れたのですが、同型品は製造が中止となっていて入手補填は不能と、歯軋りする思いでした。これを皮切りに、その後、国内旅行中に二個、02年トルコ周遊中に最後の一個も

失い、遂にダンヒル零と成り果てました。ご理解いただけな

いと思いますが、正に痛恨の極みであります。

その2 * * * * *

これも国際会議絡みのことですが、礼服に係わる問題(思い出)です。92年第二回国際会議の夕食会は、ブラックタイ着用との触れが回りました。勿論持っていません。以前モーニングを作る時と同様、やや晴れがましい気分分、事務所ビル地下のテラー(洋服屋とは少し違つ)で採寸、二三の駄目押し後、十日足らずで完成しました。試着すると馬子にも衣装、なかなかのものと鏡の中へニマリしてみたものです。ところが、これまた「ところが…」でした。事務局から、略装で可、との連絡があつたのは、二ツマリ後二三日のことでした。同行の家内には報せず、旅行鞆に収納、もしかすると着るかもと無理に思いながら。しかし、世の中やはり甘くありません。結局袖を通すことなく鞆が往復しただけとなりました。

以来何人かの人に嫁取りを打診、ある友人にはほぼ決まりということもありましたが、やはり帯に短し褌に長しと破談になり、前途に望みなしという破目になりました。だが、捨てる神あれば拾う神ありも通則でした。数年振りに来訪予定を連絡してきた後輩からの電話に期待が膨らみます。山海の珍珠(?)と高級酒で饗応し、さり気なく持ち出し着せてみました。バツリです。袖がやや短いものの、遂に嫁入りが確定です。結納品は愛用の「ル」用品全一式を張り込みました。なんと04年5月のことです。とつとつ、他愛もない十数年来のモヤモヤ思い出とも訣別です。今日からは、もう一寸増しな思い出を作るよう大事に歩んでゆくことと致しましょう。

1951年社会人としてスタートし、東京、大阪10年、北九州(4年)、そして東京と駆け巡り、鋼材・ドラム缶公害防止機器、バグフィルター、コンベアー等の販売・輸出業務に携わり、生涯、鉄とのかかわりの中で40余年が経ちました。69年に東京に戻つてからは、鉄鋼メーカー、また特にドラム缶工業会との関わりが印象に残っています。当時のドラム缶業界は、ドラム缶の軽量化、他材質への転換など多様化するニーズへの取組み、危険物運搬容器基準の国内規格への導入に伴う規格・再生・輸送などの国際化への対応等のため、広く情報を収集し、分析することが強く求められる時代でした。中でも国際化への取組みを討議する国際会議の開催、そして会議への参加が大きく望まれたのです。

一 ドラム缶工業会第二回訪米視察団

(84年10月24日～11月8日)

69年の第一回訪米視察団以来実に15年振りに実施

米国ワシントンDCメイフラワーホテルで開催のSSC(米国ドラム缶工業会)の年次総会にオブザーバーとして出席。日米欧のドラム缶工業会による国際会議開催が提唱された。米国内のドラム缶メーカー、ユーザー等を訪問、工場見学・情報交換を行う。

二 第一回新鋼製ドラム及び鋼製ペール缶製造業者国際会議

(89年10月31日～11月3日)

米国カリフォルニアサンディエゴで開催。

三 第二回同右国際会議 (92年9月20日～24日)

イタリア・フロレンスで開催。ICDM(国際ドラム缶

我が社の 生い立ち



東邦シートフレーム株式会社
相川 正会長

当社の創業者である相川道之助(1900~1994)は、昭和6年東京・日本橋に「相川銅鉄店」を開業して、名実ともに独立しました。翌年にはブリキのスクラップからスズと鉄を分離回収する「ミソフ電解」を立ち上げたのに続いて、「東京プレス工業」(現東プレ)、「東邦亜鉛」などの買収・設立に携わり、戦後も各社の経営トップとして陣頭指揮するなど進取の気性に富んだ企業家でした。

東邦シートフレームの創立は「株式会社東邦亜鉛工業所」を設立した昭和12年になっておりますが、ミソフ電解を通じた取引関係から安宅商会(現伊藤忠商事)の紹介で昭和9年に北九州・若松にあった亜鉛鉄板メーカーの「東邦工業」を買収したことに始まります。当時の本所区錦糸町の本社工場で亜鉛鉄板と樋の生産を開始しました。しかし、亜鉛鉄板は政府・軍部の生産集中という指導によって昭和15年に中止に追い込まれました。そこで、昭和16年に小松川(江戸川区)の旧ミソフ電解の敷地でドラム缶の生産を開始、昭和20年3月の東京大空襲で焼失するまで政府指定による「皇国第5318工場」として陸軍燃料本部監督下で月間1万本と当時としては大規模にドラム缶生産を行ったようです。

戦後は昭和21年に「東邦工業」に改称して本社を小松川に移してドラム缶のほか鉄線や釘などの生産を再開しました。しかし、資材の配給割当制で増産が困難になった鉄線や釘の生産を中止して、現在でも主力製品になっている亜鉛鉄板系建材とドラム缶の生産に転換しました。道之助は東邦亜鉛や東プレの経営の一線から身を引いた後も、当社の会長は平成5年まで務め、平成6年に取締役相談役の

まま逝去しました。自ら手塩にかけて創り上げた会社として愛着が強かったのでしょうか。

終戦直後のドラム缶はガス溶接で行っており、熟練工でも1時間あたり3本の生産が限界でしたが、電気溶接に切り換えて生産も倍増しました。朝鮮動乱はドラム缶の需要を爆発的に増やしました。ドラム缶の生産量は昭和25年の1万1千本から翌年4万9千本に増加したほどでした。

ドラム缶のJIS表示許可などを通じた品質改善や生産性向上に取り組みました。一方で昭和20年代後半からの産業の復興によって、石油や化学製品向けのドラム缶の需要増加が加速したことで、昭和31年に砂町(江東区)に月産3万本のドラム缶工場を完成させました。昭和39年には本社を現在の東京・日本橋に移転するとともに、社名を「東邦シートフレーム」に改称しました。昭和40年代のいざなぎ景気によって日本経済はさらに成長を続け、既存の小松川、砂町工場はあっという間に手狭になりました。そこで千葉県八千代市に建材とドラム缶の総合工場の建設を決定、昭和44年から45年にかけて順次移転しました。ドラム缶は1系列月産10万本自動製造ラインを導入し、砂町工場から移設した月産3万本ラインをステンレスなど特殊ドラム生産専用を活用することにしました。10万本の自動化ラインは地道な技術改善を積み重ね、昨年10月には月間12万3,218本の生産記録を達成しました。高い生産性を確保している自動化生産ラインと特殊生産ラインでバランスをとり、単一工場としての競争力には自信を持っています。

とはいいながらドラム缶で全国展開をできる規模ではありません。ドラム缶は物流・保管に不可欠な容器として着実な成長が見込めることから関東地区のユーザーを中心にきめ細かな事業を展開する方針を今後も堅持するつもりです。ただ、他社にない多様な製品を手掛けている特徴を生かしたいと思います。その一例として木製パレットは各国で輸入規制が強化され、くん蒸処理が義務付けられるようになっていきます。くん蒸処理が不要になり、かつ軽量でリサイクルが可能なスチール製パレットが注目されていますが、金属の加工技術とドラム缶の販売ルートというシナジー効果で新規事業に育てたいと考えています。

会 員

斎藤ドラム缶工業(株) 山陽ドラム缶工業(株) JEF協和容器(株) JFEコンテナ(株) (株)ジャパンペール
新邦工業(株) ダイカン(株) (株)東京ドラム缶製作所 東邦シートフレーム(株) (株)長尾製缶所 日鐵ドラム(株)
(株)前田製作所 森島金属工業(株) (株)山本工作所
《賛助会員》
エノモト工業(株) 三恵マツオ工業(株) 丹南工業(株) (株)大和鐵工所 三喜プレス工業(株) (株)城内製作所
東邦工板(株) (株)水上工作所

ドラム缶工業会 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 (鉄鋼会館6階)

TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969

e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp

URL : <http://www.jsda.gr.jp>

ひびき

No.42 (平成16年9月14日発行)

発行人 ドラム缶工業会

専務理事 藤野 泰弘

本誌は再生紙を使用しています。